

①おでこにタトウ

作・田中聡

核ミサイルを保有するアジアの架空の独裁国家の物語。

凋落していく独裁国家を救うべく

突如、将軍様が発した隣国への「核ミサイル発射」声明。

撃てば報復攻撃で確実に滅びてしまうのは目に見えている。

国家執務室に集まる軍人や政府高官の面々は

核ミサイルをなんとか発射させないように四苦八苦。

が、将軍様は聞く耳持たず、撃たない派には処刑までしてしまう。

どうせ死んでしまうならと、

死ぬ前にやってみたかったことを果たそうとする人も。

撃つも地獄、撃たないも地獄の状況の中、

残された道は将軍様をうまく騙すことだけ。

生にすぎる人間の悲哀や可笑しさがむき出しになる

ワンシチュエーションのブラックコメディ。

はたして核ミサイルは撃たれてしまうのだろうか。

世界の運命は七人のイエスマン達が握る。

独裁者を騙せ！

## キャスト

将軍様 「鎌田順也(ナカゴ)」

### ・政治部

首相 「猪股俊明」

外務官 「篠崎大悟(ロロ)」

### ・軍部

参謀長 「永井秀樹(青年団)」

大将 「金子岳憲」

中佐 「師岡広明」

軍曹 「成瀬正太郎」

### ・科学部

技術長 「岩崎う大(かもめんたる)」

科学者 「坂口辰平」

### ・その他

核委員 「芦原健介」

イタコ 「宮部純子(青年団/五反田団)」

## 第0場「イントロダクション」

客入りの音楽がフェードアウト。

アナウンス「アジアのある架空の小国の物語」

暗闇の中、軍歌的な勇ましい音楽が流れる。

暗転開けると、將軍様を中心に軍部、政治部、科学部の面々がどこかに視察に言っている様子のストップモーション。

將軍様は嬉しそうに微笑んでいる。

周りの面々も將軍様に合わせてものすごい作り笑い。

音楽のテンポに合わせてポーズを変える。

別の場所の視察シーンのストップモーション。

將軍様は何かを指差して嬉しそう。

周りの面々もそれに合わせて將軍様の指差す方を見て作り笑い。

音楽のテンポに合わせてポーズを変える。

別の場所の視察シーンのストップモーション。

將軍様は大笑いしている。

周りの面々もそれに合わせてものすごい作り笑い。

音楽がフェードアウトすると共に

ゆっくと暗転。

## 第1場「核ミサイルプレゼン」

明転。

テーブルには、将軍様と七人の側近が座っている。

核兵器準備委員会の委員が、

一同の前で、パワポで資料を映しながら

核ミサイルプレゼンテーションを行なっている。

核委員「世界で最も多く製造されているのが

このタイプの核ミサイルです。

信頼性には定評があります。

発射成功率、破壊力、どこを取っても

非常にハイレベルなミサイルです。

世界に脅威を与えるには、

うってつけの核ミサイルかと思われれます」

満足そうに頷く将軍様。

それを見た七人も、同調するように頷いている。

核委員「こちらは最新鋭の核ミサイルです。

従来のものに比べ格段にコンパクトになったことにより

圧倒的な機動力を生み出します。

発射設備も最小限で済みますので、

配備エリアの柔軟な展開が可能です。

敵対国家が多岐にわたる我が国の状況に

ピッタリの核ミサイルかと思われれます」

満足そうに拍手する将軍様。

それにならい、拍手する七人の側近。

核委員「しかしながら、これらの核ミサイルは、

費用の面で問題が残ります」

将軍様「はあ?」

将軍様の表情が硬くなる。

それを見た七人の側近は核委員を罵り始める。

中佐「そこをなんとかするのがお前の仕事だろ！」

核委員「はい！そこで費用的にはこちらのミサイルが最適かと」

スクリーンには貧弱そうなミサイルが映る。

大将「それを早く言え！」

核委員「ただし性能が非常に怪しくて…

これは発射実験の映像なんです…」

撃ったミサイルが空に飛ばず地上に落ちて爆発する。

核委員「このように結構な確率で落ちるらしいんです」

将軍様の表情が硬くなる。

それを見た七人の側近は核委員を再び罵り始める。

大将「オラアアー！核ミサイル自分とこに落とすアホ、

どこにいるんだ！」

中佐「貴様、処刑されたいのか！」

核委員「あ、いや、わかっておりますって！」

将軍様のことは全部わかっておりますって！

将軍様が欲しいミサイルはわかっておりますよ」

将軍様、難しかった大笑い。

皆も同様に笑顔になる。

大将「ヒヤヒヤさせるなよ」

核委員「すいませんでした。では気を取り直して。

我が核委員会としましては、

こちらの核ミサイルの購入を提言させて頂きます」

スクリーンにはさらに貧弱そうなミサイルが映る。

大将「ほっそー！」

核委員 「確かに品質は決して高くはありません。

ですが、核ミサイルであることに変わりはありません！

我が国は、核保有という事実で国際社会に圧力をかけ、

政治交渉を有利に進めるといふ国策をとっています。

撃たない核ミサイルならば、

これくらいのレベルで十分という結論に達しました。

いかがでしょう！」

七人の側近は將軍様の顔色を伺う。

將軍様の顔色が変わる。

將軍様 「誰が撃たないと言った？」

核委員 「はい？」

將軍様 「私の軍隊は最強であるべきだ！」

中佐 「最強だぞ！」

大将 「最強だ！」

核委員 「は、はい…」

將軍様 「私が世界からなめられる理由は、お前らが腰抜けだからだ」

核委員 「あ、いや私はあくまで国策の話を…」

將軍様 「私が撃たないと思っているのか？」

核委員 「え？…」

將軍様は。ピストルを取り出し構える。

將軍様 「撃たないと思っているのか！」

核委員 「え、撃つんですか？」

將軍様 「撃たないと思っているのか？」

核委員 「え…あつ、うわ！あ、あー」

あわてる核委員。

ターン！と。ピストルの鳴り響く。

ピストル撃った瞬間、暗転。

明転すると血を吹き出している核委員。

再び暗転。

明転すると、軍曹が死体を引きずって

外に出そうとしている。

将軍様「(軍曹に向かって) 待て!

(参謀長に向かって) 蹴れ!」

参謀長「蹴れ? 死体をですか?

あ、いや、私、常日頃の不摂生ですかね

痛風を発症しております

風が吹いても痛いと言われておりますので

蹴るのはちょっと難しいかと…」

将軍様「(首相に向かって) 蹴れ!」

首相「あ、私は、ホラ、先日将軍様とゴルフ行きましたでしょ。

あの時に足をグキッとやってしまつてね。ははは捻挫です。

年甲斐もなくはしゃいでましたでしょう、私。

もう無理できる歳ではないんですけどね…

蹴るのはちょっと難しいかと…」

将軍様は次に誰に言うか全体を見回している。

皆は蛇に睨まれたカエルのよう。

将軍様、大将と中佐の間ぐらいに向かって言う。

将軍様「蹴れ!」

大将と中佐は、驚いて変な声を出してしまう。

でもお互いどつちかわからない。

大将と中佐は、お互い譲り合っている。

将軍様は、中佐を顎で指す。

中佐は、意を決して立ち上がる。

将軍様「(科学者に向かって) やっぱお前蹴れ!」

科学者、驚く。

科学者「え! 俺!?!」

中佐が安堵の表情で座る。

科学者「いや、俺、ケンカとかやったことないし蹴るとかはちょっと」



参謀長「将軍様に忠誠を誓っているなら蹴れ」

えー、と言う顔。

将軍様「蹴れ！」

科学者「あ、はい」

科学者、立ち上がって死体の元に行く。

首相「将軍様に忠誠を誓っているなら蹴れ」

科学者、ちよこつと触るぐらいに蹴る。

将軍様「蹴れ！」

科学者「え、今、蹴った…」

参謀長「蹴れ！」

首相「蹴れ！」

技術長「蹴れ！」

外務官「蹴れ！」

将軍様「蹴れ！」

科学者「はい！」

科学者、意を決する。

科学者「うおおー……！！」

気合いを入れて足を思い切り振り上げる。

振り下ろそうとした瞬間。

科学者「足、つった！」

科学者、蹴らずに転がる。

科学者「いっててー！」

暗転。

暗い中、ラジオの音声が響き渡る。

ラジオ「我が国は、偉大なる將軍様のご意志のもと、

卑劣極まる経済制裁に対抗すべく、

敵国に向け、核ミサイルの発射をここに宣言する」

## 第2場「発射を食い止める」

明転。

執務室に入ってくる七人の側近。

大将「さあ！戦だ！戦だ！」

中佐「やってやりましょう！」

一同、席に着く。

参謀長「発射準備の方は？」

大将「完了しております！」

首相「ちよちよ！ちよつと待ってよ。」

軍部は本気で発射するつもりなの？

中佐「当たり前です！今更何を言っておられるんですか？」

外務官「撃ったら我が国は間違いなく滅ぶぞ！」

大将「国が滅ぶう！？聞き捨てならんな」

中佐「聞き捨てならんぞ！」

参謀長、いきり立つ大将と中佐をなだめる。

参謀長「まあまあ。」

首相、将軍様がああ言ったら撃つしかないのではないか？

首相「撃つしかないよね」

参謀長「核は撃つ目的じゃなかったはずだが」

首相「そつそつ！」

世界は我々の動向を常に見守らざるを得なくなる状況。

それを作り出すブラフだったんだけどね」

参謀長「軍部もそう認識しておる」

首相「実際に発射してしまったら、どうなると思う？」

中佐「将軍様に世界がひれ伏すまでよ！」

首相「脳内、お花畑だな…」

中佐「脳内に、お花畑はありませんが！」

大将「我々軍部をバカにしておるのですか！」

首相「いやいや、そういうわけじゃないんだけど…」

(外務官に向かって) 実際に核ミサイルを発射したら  
どうなるか教えてあげて」

外務官「はい。我が国がたとえ一発でも核ミサイルを発射すると、  
即刻、報復の核ミサイルが世界中から

我が国めがけて発射されるシステムになっています。  
発射した瞬間、我が国は確実に滅びます…

(身振り手振りを加えて) 撃った瞬間、ドーン！  
撃った瞬間、ドーン！です」

中佐「貴様！知った風な口を聞くな！」

大将「我が国は永遠だ！何がドーン！だ！」

参謀長「(大将と中佐を制して) まあまあ。

技術長、実際のところどうなのかね？」

技術長「(外務官を指して) 彼の言っていることは合っていますよ。  
撃てば、我が国だけ確実に滅びます。ドーン！です」

中佐「相手はドーンじゃないのか!?!」

技術長「我が国の核ミサイル技術は、先進国に比べ、  
かなり遅れをとっていると言わざるを得ません。

もし、我々が核ミサイルを撃ったとしても、  
ミサイル迎撃システムですぐに撃ち落とされ、  
相手の撃ったミサイルのみが、

我が国を直撃します、だからドーン！です」

中佐「こっちの迎撃システムは?!」

技術長「そんな高価なもの、マジであると思ってるのかあ？」

大将「なんでないんだ！」

お前ら科学部が金をジャブジャブ使うからだろう！」

技術長「宇宙開発が中止になってからは全然使ってませんが何か？  
まったく予算が回ってきませんが何か？

むしろあなたたち軍部の方がジャブジャブ使ってませんか？  
昨日だって日本の高級な神戸牛食いながら  
フランスのモエシャンドン飲んで…」

大佐「將軍さまがご希望されておるのだから仕方がなからう」

技術長「国家予算でうまいものたらふく喰やがって、うらやましい！」  
科学者「(大将を指差しながら) うらやましい！」

大佐「なんだオマエ指差しやがって！必要経費ですが何か？」

技術長「経費削減していれば今頃は素敵な迎撃システムの  
一台や二台、買えたはずなんですけどね」

参謀長「まあまあ。国家予算の話は後にして、

今は相手のミサイルが直撃してしまうって話なんだが…」

中佐「ミサイルを撃つたら犬死じゃないですか!」

技術長「だからさつきからそう言ってるんじゃない?」

中佐「ミサイル撃たれても戦い続けます!」

外務官「撃たれたら死ぬって、ドーン!だから」

中佐「死なない!」

技術長「死ぬって言ってんだろ!」

大佐「貴様!腰の抜けたことぬかしやがって…」

参謀長「(大佐、中佐を制して) まあまあ!

(困った顔で首相の方を見て) 首相…」

首相「どうしよっか?何かいい案ない?」

一同、沈黙。

外務官「撃たなければいいんじゃないでしょうか」

中佐「何!?!」

外務官「將軍様に発射を思いとどまっていたadakimashou」

中佐「貴様!將軍様にも申す気かあ?!」

外務官「他に手があるなら聞かせてください」

中佐「將軍様の御意志は絶対だ!」

外務官「死にますよ、ドーン!ですよ」

中佐「死ぬのが怖くて軍人なんかやっつけられるか!」

外務官「このままだと將軍様共々ドーン!だって言ってるんですよ!」

中佐「貴様!將軍様が死ぬって言っているのか!?!」

外務官「死ぬって言うてるんですよ!」

中佐「將軍様が死ぬわけないだろ!」

首相「(軍部の三人に向かって) いや、

彼も將軍様を思ってるんだよ。

それがわからんわけではないだろう?」

参謀長「わからんわけではないが、核ミサイル撃たないって、

そんなことできるのか?」

首相「なんとか軍部の方から言ってもらうことできないかなあ」

参謀長、しばらく考え込む。

参謀長「いや無理無理無理！」

首相「だよな、超イエスマンだもんね」

参謀長「わかってらっしゃる！」

将軍様が白といえば白、黒といえば黒。

とても説得なんてできません！」

首相「（深く頷いて）知ってた」

参謀長「この間、将軍様にローリングストーンズの

どこがいいのって聞かれた時に

ブルースの観点からストーンズの良さを

真剣に語って見たわけですよ」

首相「そりやマディ・ウオーターズから語るよね」

参謀長「そうそうそうそう！え？首相！ご存知なんですか？」

首相「この時代のいいバンドは全部ブルースが元になっ

ているっわけだからね」

参謀長「そうやって熱く語ったわけなんですよ！」

技術長「おいおい、オッサンの与太話が始まってるぞ。

誰か止めないと、永遠語るぞー」

首相「語らせてよ、ねえ！」

参謀長「語らせてよ、ねえ！」

首相「まあ、リトル・リチャードとかチャックベリーとか

細かい話するときりがないけど…」

参謀長「お！首相、そこら好きなんですか？」

首相「参謀長も、そこら好きなんですか？」

首相と参謀長、お互い笑い合う。

技術長「マジ、飲み屋行け！」

首相「ストーンズがブルースをロックに変えた」

参謀長「そうそう！でね、

将軍様が大好きなワンオクも、

ストーンズがあつたから生まれたんだって

語って見たんですよ」

首相「ワンオク？」

参謀長「ワンオクロック、日本のロックバンド。若者に超人気なの」

首相「（外務官に向かって）知ってる？」

外務官「大好きです…」

(カラダを動かしながらワンオクの曲を歌い出す)「

中佐「おい！完全感覚ドリマー！？何だよそれ！バカか！

貴様！敵国の音楽を好きだと抜かすのか！」

外務官「あれ？中佐は好きな曲とかないんですか？」

中佐「もちろん国歌だ！」

(軍歌っぽい歌を歌い出す)「

みんな、ドン引きしているが、

大将だけ歌いたそうにムズムズしている。

技術長「おいマジかよ！こんな歌すきなやついるのかよ」

ついに耐えきれなくて、

大将も中佐に合わせて歌い出してしまっ。

技術長「好きなのかよ！」

二人で気持ちよさそうに歌っている。

技術長「おい！うるさい二人！カラオケ行け！」

中佐「国歌をうるさいとは、処刑するぞ！」

大将「するぞ！」

技術長「してみる、ほら、早く処刑してくれ」

参謀長「(二人を制して) 処刑はしませーん！

ちょっと落ち着いてくださいーい！」

中佐「は、失礼しました…」

首相「何の話だっけ？」

参謀長「將軍様がワンオク大好きって話」

首相「そうそう！で？」

参謀長「で、ストーンズがいてワンオクがいるっていう

ロックのルーツ的な話をしたわけよ」

首相「で、で？」

参謀長「そしたら將軍様、

ワンオクよりストーンズの方が上なのか！  
って激ギレしてさ」

首相「えー！？…ストーンズの方が上じゃない？」

外務官「お言葉ですがワンオクもかなりいいですよ

(ワンオクを歌って踊り出す)

中佐「おい、うるさい、処刑するぞ！」

参謀長「処刑はしません！」

中佐「日本やアメリカを褒めちぎるなんて信じられません！」

首相「ストーンズは実際はイギリスだけどね」

中佐「知らんがな！」

参謀長「まあまあ、で、激ギレした將軍様が俺に

『ストーンズよりワンオクの方が上だ』って言えって…」

首相「なんだそりゃ？」

一同、沈黙。

首相「言ったの？」

参謀長「…言った」

首相「えええええええ、まじいいいー」

科学者「うわ、ダサ！僕は將軍様に言われても死体蹴らなかったのに」

技術長「え、お前、あそこで足つったの演技なの？」

科学者「完全に演技ですね」

技術長「嘘つくな！『うわああ』とか顔、超マジだっただろ」

科学者「騙されましたね！敵を騙すには味方からって」

技術長「おい、こいつ將軍様のこと敵って言ってるぞ」

中佐「処刑するぞ！」

参謀長「処刑して欲しいのは俺だよ」

首相「『ストーンズよりワンオクが上』って言っちゃったんだもんね」

参謀長「俺のロックンロールなんて、

(指で数ミリのジェスチャーして) こんなちっちゃかった…」

首相「反抗するのがロックンロールなのに…」

参謀長「いや、あんなキレてたらイエスマンになるしかないじゃん。

反抗なんて絶対できないって。想像してみ」

首相「(想像して)俺のロックも縮こまるわ」

参謀長「でしょ！ロックなんてカッコイイこと言ってるられないって」

首相「だね。」

軍部的に説得ができないなら

(技術長の方を向いて) 科学的な見地で説得するってどう？

データでしっかり語ればいけるんじゃない」



技術長、しばらく考えてから。

技術長「技術的なデータからリスクを割り出せば

絶対に撃たない方がいいという明確な結論は導き出せます」

首相「じゃ、データで説得頼むよ！」

技術長「嫌です！」

首相「なんで？」

技術長「いや、僕、ストーンズ好きなんで」

首相「おお、そうなんだ！若いのに見所あるじゃないか」

技術長「（科学者に向かつて）お前、ワンオク好きそうだから

お前が説得したら？」

科学者「えええ？僕ですか？」

しばらく間。

科学者「いいですよ。やってみます！」

技術長「（ちよっと驚いて）スゴイな！

死体蹴れって言うやつにモノ申せんの？」

首相「素晴らしい！」

中佐「大丈夫かよ？足つんなよ」

科学者「あれは演技。僕、いける気がします。」

將軍様とはワンオク好き同士のシンパシーを感じるんです」

技術長「え？ワンオクってそんなスゴイの？ファン同士の繋がりが」

大将「よくわからんが、ビビって逃げんなよ！」

参謀長「怖いぜー」

科学者「とは言っても、いろいろ援護していただけるんですよ？」

首相「もちろんだ！私の政治生命をかけよう！」

参謀長「軍部も全面的に協力する！」

科学者「とか言いながら、さっき蹴れ蹴れ、一緒に言っていましたよね？」

大将「『実直の虎』と呼ばれている俺だ！嘘はつかん！」

外務官「では、データを集めて科学的な見地から

將軍様に核ミサイルを撃たせないように説得する、

でよろしいですね」

一同、頷く。

首相「よっしゃー！ストーンズの仇とってやるぞ！」

いくぜ！ロックンロール！」

参謀長「フーーーーーーー！」

暗転。

明転すると、厳かな音楽が流れる。

一同シヤンとしている。

そこに将軍様登場。

将軍様「いつ発射するんだ？」

しばらく、周りを見回す。

誰も何も答えない。将軍様は首相をじっと見ている。

首相、その圧力に耐えられずに立ち上がる。

首相「はい、今回の核ミサイル発射に関しては、

我が国の運命を握る最重要案件として、

国を挙げて、早急に、慎重かつ大胆に進めております。

私としましては今すぐにでも発射したいと思っております！」

一同、首相のイエスマンっぷりに驚く。

将軍様「どこまで進んでいるんだよー！」

首相「具体的な進捗状況については、参謀長の方から…」

将軍様「(参謀長に向かって) どうなんだ？」

参謀長「えー今回の将軍様のご英断、

誠に素晴らしきことと感じております。

軍部といたしましては、憎つき敵国どもに

我が国の恐ろしさをわからせるため、

すぐにでも発射を、と考えております」

一同、参謀長のイエスマンっぷりに驚く。

将軍様「準備は整ったのかと聞いておる」

参謀長「詳細につきましては、専門家がおりますので。」

(科学者に向かって)「おい！」

科学者、唾を飲む。

科学者「(意を決する感じで) 発射準備の方は最終調整の段階です。しかし、ちよつとした懸念があります」

将軍様「(怖い顔で睨みながら) なんだ？」

科学者、恐れおののき言葉を失う。

科学者「あ、う、いや」

将軍様「なんだ！」

睨まれた科学者は怖くなって

自分のデータを技術長に渡してしまう。

技術長、ゆつくり立ち上がる。

技術長「ミサイル技術の科学的検証の結果、

我が国の核ミサイルが発射直後に

敵国の迎撃ミサイルによって撃ち落とされる確率は95%。

しかし我が国には

敵国の核ミサイルを撃ち落とすシステムはありません」

将軍様「で、ああ!?!」

技術長「発射は思い留まるべき…」

将軍様「(立ち上がりながら) あああ！」

技術長「…と、卑しくもこの者は申しておるようです」

科学者「え?!」

科学者、絶望的な顔になる。

将軍様、科学者を睨む。

将軍様、一同を見渡す。

目をそらす者や首をかしげる者。

科学者「あ、ホラ、やっぱり…」

将軍様「(科学者を睨みながら) はあ？」

科学者「(手元の資料を慌ててめくりながら) デ、データから…」

将軍様 「(科学者の話を遮って) 首相!

これは政治局としての見解か?」

首相 「いいえ! 初耳です!」

将軍様 「では、軍部としての見解か?」

参謀長 「いいえ! 弱腰学者の戯言です!」

将軍様 「(科学者に向かつて) 貴様! とにかくすぐに撃て!」

科学者 「(ビビりまくりながら) あ、あ、いえ、あの、

あ! 将軍様、実は…」

大将 「黙れ! 見苦しい!」

将軍様、ピストルを手に取る。

外務官 「あ、あの! (何か言いかけて、首相に止められる)」

科学者 「(わめきながら) ちよちよ! はなしが違うじゃないか!

あ、あの、おい! お前ら協力するって…

あ、将軍様! ワンオク! ワンオク!

(ワンオクを唄い出す)

うわあああ、ひっ、ひっ!」

将軍様、ピストルを撃つ。

暗転。

明転すると血を吹き出している科学者。

暗転。

明転すると血だらけの科学者を軍曹が引きずっている。

一同、沈黙。

参謀長 「将軍様、あれからワンオク聞きまくったんですよ…

超いいですね! ストーンズなんか足元にも及びませんね。

ストーンズよりワンオクの方が上です」

将軍様 「(嬉しそうに) だろう。

首相? ワンオク知ってる?」

首相 「もちろん知ってますとも!

ストーンズよりワンオクの方が上です…よね…」

一同、作り笑い。

外務官「(ワンオクの唄を無理して歌う)」

一同、さらに作り笑い。

暗転。

### 第3場「どうせ死んでしまおうなら」

明転すると静まり返った執務室。

将軍様はいない。

首相が携帯ボトルでウイスキーを飲んでいる。

外務官「首相、飲みながらはまずいんじゃないでしょうか？」

首相「ローリングストーンズに申し訳なくて…」

参謀長「俺にもくれ」

参謀長は首相からボトルをもらって飲み始める。

外務官「参謀長どの！」

参謀長「飲まずにやっつてられんよ」

外務官「諦めるんですか？」

二人、無視して酒を飲んでいる。

外務官「(少し強い口調で) 諦めるんですか？」

首相「(怒りながら) 俺だって死にたくないよ！」

外務官「だったら何か考えましょうよ！」

首相「何やっても無理なんだよ！」

見ただろ！将軍様には何も言えないんだよ

外務官、何も言わない。

首相「怖いんだよ！あんな無様に殺されたくないんだよ！」

外務官、何も言わない。

首相「どうせ、死ぬなら処刑されるより

核ミサイルで死ぬ方が全然マシなんだよ！」

外務官、少ししてから話し始める。

外務官「首相、あなた一人だったらどっちでもいんですけど」

核ミサイルを撃ったら、私だけでなく

国民も死ぬことになるんですよ。

そんなの大量虐殺してるのと変わらないじゃないですか！」

首相、何も言わない。

外務官「首相、あなたに正義はあるんですか？」

首相「そもそもこの国に正義もクソもあるか！」

外務官、絶望的な顔をしている。

首相「笑いたきゃ、笑えよ！」

所詮、俺なんかお飾りなんだよ！

残りの人生、將軍様の顔を伺って生き続けるんだよ！」

参謀長「昔は怖いもの何にもなかったのに

この歳になると輝かしいキャリアにド口塗りたくなくてさ。

だからさ、將軍様の顔色ばかり窺ってさ…

カッコ悪いいよなあ…」

首相「どうせ死ぬなら偉いまま死なせてください」

参謀長「逃げ切りたいんだよ…このまま」

外務官「いや、だから核ミサイルを撃たせなきゃいいじゃないですか！

処刑でも死なない！核ミサイルでも死なない！

とにかく死にたくないんですよ！」

参謀長「すまないな…俺たちには何もできない」

首相「申し訳ない…」

一同、静かになる。

参謀長「引退したらハーレーを買おうと思ってたんだよね」

大将「ハーレーって、あのアメリカのハーレーですか？」

参謀長「そう、ハーレーダビッドソン。乗りたかったなあ」

外務官「え？参謀長がハーレー…」

想像するみんなに笑いが起こる。

首相「俺は3pしてみたかったなあ」

一同大笑い。

技術長「そんなにいいとは思いませんがね」

首相「お、何？やったことあんだ、悔しいなあ！

じゃ、君は何したい？」

技術長「宇宙に行きたかったんです…」

首相「ああ、そうだ！

自分の国じゃ宇宙開発費を減らされて

亡命してきたんだよな？」

技術長「先代は夢があった。

予算だってバンバンかけてくれたし、

ロケットだってもうすぐできそうだったのに…」

首相「先代が亡くなって、

一気に軍拡化しちゃったもんね」

技術長「もうすぐ宇宙に行けそうだったのに…」

参謀長「すまん、軍部ばかり予算使って」

大将「必要経費ですが何か？」

技術長「無駄な金使いやがって！

あんたらがジャブジャブ使ったお金を

宇宙開発にかけてたら今頃とくに月ぐらいは行けてたのに！

参謀長「まあまあ、ホント申し訳ない…

將軍様のご意向だからしょうがないところあるんだわ…」

首相「（技術長に向かって）宇宙に行く以外、やりたいことないの？」

技術長「マリファナ」

首相「マリファナやりたいの？」

参謀長「いいねいいね！ロックだね！」

首相「お安い御用だよ」

外務官「持ってるんですか！」

首相「当然！」

外務官「ちょーちょー、あなたの正義はマジでどこにあるんですか？」

技術長「LSD」

参謀長「メチャロック！」

外務官「何ですか？それ？」

首相「シャブ」



外務官「シヤブ？」

首相「覚醒剤」

外務官「覚醒剤のことですか！？」

参謀長「あ、ちなみに覚醒剤は我が国唯一の輸出品ね」

首相「表向きには言えないけどね、はははは…

やりたいの？」

技術長「どうせ宇宙に行けないならせめて頭の中に宇宙を作りたい…」

首相「持ってきてやるよ」

外務官「ええ！それはやめましょうよ」

首相「いいじゃないか、やりたいこと全部やっちゃおうぜ！」

技術長「ありがとうございます！」

首相「冗談だよお！」

外務官「びっくりした！」

参謀長「当たり前だろ！手出したら終わりだからね」

外務官「ですよね」

首相「（中佐に向かって）君はやり残したことからか

なさそうだけど何かある？」

技術長「（キョトンとしながら）え！オレのターン終わり？」

中佐「自分ですか？自分は…」

しばらく、沈黙。

首相「この際やり残したとやっといいたほうがいいぞ！」

しばらく、沈黙。

中佐「自分は…、タトウー入れてみたいです！」

首相「おー、タトウーか！入れろ入れろ！

どうせ数ヶ月の命だ！」

大将「どこに入れるんだ？」

中佐「まあ、腕とかですかね」

首相「なんか普通だな。人生最後のイベントなんだから

もっとこう、ド派手に…」

技術長「全身に入れてみる」

中佐「そんな時間、残っているんでしょうか？」

一同、沈黙。

技術長「最近、ヨーロッパの若者の間では、

おでこにタトウウを入れるのが流行ってるんだよ。

女にモテるらしいぞ」

中佐「おでこに…確かにカッコいいかも…」

外務官「（下を向いて笑いをこらえている）ぷっ」

大将「でも、これ以上モテてもなあ…」

驚いた一同が大将の方を見る。

首相「そんなモテモテの大将は、何かやり残したことないの？」

大将「自分、英語を喋りたかったです！」

首相「え、そんなこと!？」

（外務官を指して）こいつに習えばいいじゃん」

外務官「そんなすぐには喋れませんよ」

大将「せめてネイティブな感じで『オーマイゴッド!』を  
使いこなしたかったなあ」

外務官「『オーマイガッ!』ですか？」

大将「そう、それ!『オーマイゴッド!』」

外務官「違う違う…オーマイガッ!です」

大将「オーマイガッ!?!」

外務官「そうそう!オーマイガッ!」

大将「オーマイガッ!」

外務官「いいですね!オーマイガッ!」

大将「オーマイガッ!」

外務官「リピート・アフター・ミー!オーマイガッ!」

一同「オーマイガッ!」

外務官「オーマイガッ!」

一同「オーマイガッ!」

外務官「（落ち込んだ感じで）オーマイガッ!」

一同「（落ち込んだ感じで）オーマイガッ!」

外務官「（怒った感じで）オーマイガッ!」

一同「（怒った感じで）オーマイガッ!」

外務官「（大げさに）オーマイガッ!」

一同「（大げさに）オーマイガッ!」

外務官「ブルシット！」

一同「ブルシット！」

外務官「ジーザスクライスト！」

一同「ジーザスクライスト！」

外務官「ジーザスファッキンクライスト！」

一同「ジーザスファッキンクライスト！」

外務官「ガツデム！」

一同「ガツデム！」

外務官「ガツデム！」

一同「ガツデム！」

外務官「ガツデム！」

一同「ガツデム！」

外務官「ガツデム！」

一同「ガツデム！」

外務官「ガツデム！」

一同「ガツデム！」

一同大盛り上がり。

みんな幸せな感じ。

首相「いや〜みんなロックだな！」

参謀長「叫ぶって気持ちいいね。これこそ、ロックの衝動！」

大将「死にたくない！ガツデム！」

一同「ガツデム！」

大将「死にたくない！ガツデーデーデーム！」

一同「ガツデーデーデーム！」

一同笑顔。

首相「うっ、飲みすぎた…」

首相、吐きそう。

暗転。ゲロを吐く音。

明転するとゲロを机に吹き出している首相。

暗転。

明転すると軍曹がゲロの入った袋を持っている。

ゲロ袋を持って出て行く。  
皆は、それを見て吐きそうな顔をしている。

首相「ガッデム！すまん！今日はもう解散しよっか…」  
外務官「そうですね…」

一同退場。

参謀長と首相だけ残っている。

参謀長「大丈夫？」

首相「久々にはしゃぎすぎた」

参謀長「楽しかったね、叫ぶの…」

首相「あかさ、バンドやらなら」

参謀長「バンド？」

首相「一緒に叫ぼうよ」

参謀長「叫びたい」

首相「参謀長とだったらできそうな気がする」

参謀長「でも楽器とか全然できませんですよ」

首相「教えてやるよ」

参謀長「ロックンロール！」

いずれストーンズみたいなバンドやりたいね」

首相「ね。3pやりたいって、完全にストーンズの影響だからね」

参謀長「ミック・ジャガーになりたかったんですか！」

二人、笑う。

参謀長「昔のフォーク歌手でオデッタって知ってるよね」

首相「『WATERBOY』唄ってたオデッタね」

参謀長「そう、その歌でさ、

ギターはなんでも壊せるハンマーだって歌うんだよ。

フォーク歌手なのに、こうやってギターバンバン叩いてさ」

首相「撃ち砕け、この岩をつて、カッコイイよね。

ギターが最強なんだよ…」

参謀長「銃よりギター持ちたかった…」

首相「やろうぜ！バンド！」

参謀長「でも今からじゃ、遅くない？もう死ぬじゃん」

首相「遅くないって！」

なんとかミサイル撃たせなければいんだから！」

参謀長「それができればね」

首相「できるさー！」

参謀長「やりたいなあ…バンド」

首相「やろうぜ…」

参謀長「やれるかなあ…」

首相「絶対やろうぜ…」

暗転。

アナウンス「十年前」

明転すると舞台にはキッチリとした服を着た技術長のみ。

技術長は嬉しそうに誰かに語っている様子。

技術長「私、宇宙工学を専門にしております。

そんなスパイだなんて滅相ありません！

大將軍様、ご存知でしょうか？

有人ロケットを一番打ち上げている国は

アメリカでも日本でもありません。

なんとインドなんです。

インドは有り余る人材と金で

有人ロケットを打ち上げまくってます。

中国なんて自分達で宇宙ステーション作って、

自分達で有人ロケットを打ち上げてまくってます！

民間はアマゾンが

もうすぐ有人ロケットを作ると言われています。

そんな時代なんです。

先進国じゃなくても行けるんです！

宇宙は金と技術さえあれば行けるんです！

私の技術と大將軍様の援助があれば絶対宇宙に行けます！

大將軍様、核ミサイルを打ち上げるよりも、

有人ロケットを打ち上げる方がロマンがありませんか？」

暗転。

## 第4場「最悪な晩餐」

明転。

いつもの七人と、傍に軍曹が立っている。

皆、真剣な面持ち。中佐だけ泣いている。

首相「(毒の瓶を机に置きながら) 誰か、毒殺できない?」

中佐「だからー! やめてくださいって!」

外務官「いや、私も毒殺は反対です!」

参謀長「即効性の毒だから足つかないって」

中佐「ヤダヤダヤダ! あんたたち何考えてんすか!

暗殺するって正気ですか?」

外務官「やめましょうよ!」

技術長「だから一人の命と国民の命、どっち救うんだよ」

中佐「そんな命の計算なんてできません!

將軍様は僕の全てなんです!」

大将「私も將軍様が全てだ!」

外務官「私は…」

首相「誰か、毒殺できない?」

皆、手を上げない。しばらく間がある。

参謀長、周りを見回して軍曹を見つける。

参謀長「お、軍曹! お前なら足つかないから頼むよ」

軍曹「え、俺ですか!」

首相「国を救った英雄として語り継がれるぞ!」

軍曹、しばらく悩む。

中佐「バカなことはやめろ!」

外務官「ほんとにやるんですか?」

参謀長「成功したら三階級特進だ!」

軍曹「自分やります!」

首相と参謀長と技術長は喜んでいる。

中佐はうなだれる。  
急に、外から声が聞こえる。

科学者「俺がやる————！」

死んだと思っていた科学者が  
車椅子に乗って頭に包帯グルグル巻きで  
少し片言になり再登場。

科学者「俺にやらせてくれ！ぶち殺してやる！」

参謀長「お前、生きていたのか？」

科学者「頭に弾丸入ってるけどな！俺は不死身だ————！」

技術長「性格、完全に変わってないか、こいつ」

科学者「ぶち殺してやるう！」

首相「これは頼もしいぞ！」

技術長「どこがだよ！」

参謀長「いやいやこいつは頼もしい！」

科学者「一度死んだ体だ、どうなっても構わねえ！」

中佐「やめてくれ！僕にとって将軍様が全てなんだ！」

科学者「知るかボケ！」

あいつ一人殺せば、ここにいる全員及び

国民すべてが助かるんだ！

やらないわけないだろ、ボケ！」

中佐、言葉が出ない。

技術長「口は悪いが、言ってることは全て正しいぞ、

このマッドサイエンティストは」

科学者「ぶち殺してやる！あいつをよ！」

大将「オラア！さっきから聞いてりゃ

将軍様のことをあいつ呼ばわりしやがって

お前、ナンボのもんじゃない！」

科学者「なんだとコラア！このクソガキがあ！」

大将「誰がクソガキじゃ、このクソガキがあ！」

技術長「おい、昔の体育館裏みたいになってんぞ」

科学者「うっさい！ボケエ！どたまかち割んぞ！」

大将「かち割ってみろ！このボケナスが！」

首相「（かなり気合入った感じで）うるさいコラー！ガキどもが！」

大将と科学者、静かになる。

技術長「いやいや、こいつじゃ無理でしょ。

（軍曹を指して）彼が毒殺するって決まってたでしょ」

参謀長「じゃ、我々が將軍様の気を引いてるうちに

この毒を飲み物に入れてくれ」

軍曹、参謀長に毒の瓶をもらいに行く。

科学者「（軍曹に向かって）おい！こっち持ってこい！

おい！オマエ！やるのか？あ！

やってやるよ！かかってこい！

勝った方がやるんだよ！」

科学者が車椅子のまま、ファイティングポーズをとり

ケンカしようとする。パンチを出した瞬間、

車椅子からずり落ちて地面に突っ伏す。

科学者「ううう…障害者だからってバカにしやがって…

こんなはずじゃなかったんだよおーううう」

軍曹、助けに行くと科学者は軍曹の腕をキメる。

軍曹、タップしても科学者は離さない。

軍曹「ぎゃあああああー！」

軍曹、科学者から離れる。

参謀長「（軍曹に向かって）情けない！」

科学者は毒の瓶を取る。

首相「やっぱり頼もしいぞー！」



科学者「やってやるう！はははははは…やってやるう！」

暗転。

明転すると食事シーン。

將軍様を中心にいつも七人が席に座って食事をしている。

シーンとした食事会。当然、首相や参謀長は

將軍様の気を引かず普通に食事をしている。

科学者が將軍様に近寄ろうとするも

車椅子の「キィキィ」という音が気になり、

將軍様がこちらを向いてしまう。

科学者、遠くを指差して「あれなんだろう？」と

將軍様の視線を遠くにそらすも、

動き出すと車椅子の「キィキィ」でこちらを向いてしまう。

科学者がイライラして震え出す。

將軍様「どうした？」

外務官「後遺症で震えてるだけだと思います」

外務官、意を決して將軍様の好きなワンオクを歌い出す。

首相と参謀長にも促して歌わせる。

三人でワンオクを歌うと

將軍様は立ち上がり三人の近くに寄り喜んで拍手しだす。

これはチャンスと科学者は

將軍様のワイングラスに毒を入れる。

唄っていた三人は、毒を入れたことを確認して歌をやめる。

將軍様「ワンオク、いいな！」

將軍様がワイングラスを持ち、飲もうとするも

なかなか飲まない。

ついに飲もうとした瞬間、

中佐が將軍様のワイングラスを取り上げる。

中佐「毒味が済んでおりません！」

ワインを飲もうとする中佐。

その瞬間に大将が中佐のワイングラスを取り上げる。

大将「ワインの味がわからんやつに毒味がつとまるか！」

意を決して一気に飲み干してしまう。

皆、驚く。

そして皆が見守る中、

カラダに変化を感じるのを待つ大将。

何も起こらない。

大将「これはとても美味しいワインでございます…！」

将軍様、ワインを飲まれたことに怒り狂う。

将軍様「なんだよ、なんで飲んだよ！」

(しばらく大将と中佐のことを怒る)

将軍様、立ち上がる。

将軍様「おい！お前ら！」

ミサイル発射は、俺の誕生日！二ヶ月後だからな！

それができなければ、お前ら全員処刑するからな！」

皆、絶望的。将軍様怒りながら退出。

完全にいなくなったのを確認して

なんで毒が効かなかったのかと不思議がる皆。

首相「やっぱ、将軍様は殺せないよう…入れたの、ただの下剤…」

皆、大将を見る。なんかお腹が下ってきたような気がする。

中佐「(嬉し泣きしながら)良かったー！」

技術長、ガツカリする。

技術長「なんでわざわざ下剤入れるんだよ。」

やんなきゃいいじゃんよ!」

首相「嬉しかったんだよ、一つになってんのがさ!

みんなの気持ちを無駄にしたくなかったんだよ…」

技術長「なんだよ、それ! だってたらわざわざ下剤入れなくても

水とかでいいじゃんよ!」

首相「みんながせっかく一つになってたから

少しでもやってやりたかったんだよ…」

技術長「意味わかんねえよ!」

大将、お腹が痛くなり

お尻を抑えながらゆっくり出て行く。

科学者「オレの苦勞を——返せええええええええええ!」

暗転。

アナウンス「十年前」

明転すると舞台にはキツチリとした服を着た技術長のみ。

技術長は嬉しそうに誰かに語っている様子。

技術長「大將軍様、NASAの無人宇宙探査機ボイジャーって

ご存知ですよねです。

1970年代終わり頃打ち上げられ、

今も宇宙の端っこを目指して飛び続けています。

宇宙の端っこなんてあるかわからないのに

端っこ目指して40年間飛び続けているんですよ。

孤独でしょうね、ボイジャー…でもロマンがありますよね!

え! 大將軍様も好きなんですか?! ボイジャー! 嬉しいなあ!

必ずや、必ずや一緒に、宇宙に行きましょうね!」

暗転。

## 第5場「核シエルターに誰いれる？」

明転。

首相、参謀長、技術長が座っている。

首相と参謀長はギターの練習をしている。

首相はギターの練習をしながら

ウイスキーのボトルから直接飲んでいる。

参謀長はバイク用の革ベストを着ている。

技術長はマリファナを吸っている。

科学者は車椅子のまま、眠っているのかピクリとも動かない。

首相「(ギターを弾きながら) こうやってC、E m、F、G、  
なんかよくない?」

参謀長「うわ、なんかもう名曲感あるわ」

技術長「(水パイプから顔をあげて)

首相ありがとうございます…

ふふふふ、マリファナ、ヤヴァイ…」

首相「(ギターをC/E m/F/G、で弾き唄う)

♪マリファナ〜ヤヴァイ〜きらめく瞬間〜

参謀長「(ギターをC/E m/F/G、で弾き唄う)

♪核ミサイルは撃ちたくない〜

だってみんな灰になっちゃうんだもん」

技術長「ハイになってるよおー」

参謀長「いや灰ね…」

首相「反戦ソングじゃん!」

大将、中佐が入ってくる。

中佐、ずっと大将のおでこのタトウを

惚れ惚れと見ていたが声を出す。

中佐「(大将のおでこのタトウを見て)

いやマジカッコよくないですか?!」

中佐、参謀長に促す。

首相と参謀長、笑いをこらえる。

中佐「大将さすがです！ホントにカッコイイです！」

大将「そうでもないって…お前のタトゥーもカッコイイよ！」

中佐「え、マジっすか?!へへへ」

大佐「それなんて書いてあんの？」

(タトゥーに彫ってある文字を読みながら)

エリイ?エリウリ?…」

中佐「エリカです！」

自分、諜報部のエリカと付き合いたかったんです！」

一同驚く。

大将「いや…でも…あの娘はコブ付きだよ？」

中佐「ホントですか！」

大将「しかも、父親は將軍様って噂…」

中佐「えっ!マジですか…」

首相「有名な話」

中佐、しばらく考え込むが急にテンション上がる。

中佐「いいんです!子供がいようと、將軍様の女性であろうと

好きなものは好きなんです!」

技術長「將軍様と、穴兄弟ふふふ、ホールブラザーふふふ」

中佐「バカにしてんのか!」

大将「うん!エリカはいい女だぞ。」

(エリカのことを思い出して股間をちょっと触る)

首相「やったのか?」

大将「(明らかにやった様子で)やってないですって!

やってない、はは!」

中佐「これ完全やった人の反応じゃないですか」

大将「いやいや、やってないですって!」

技術長「大将ともホールブラザーズ…ふふふふ」

外務官、入ってくる。

このグダグダな状況を見て絶望する。

外務官「ちよつと！なんですか？

グダグダじゃないですか！

まだ死ぬって決まったわけじゃないでしょう！

あのー死なない方法、考えたんです…」

外務官は大将のおでこのタトウーに気づく。

外務官「お！…」

外務官、笑いをこらえながらおでこのタトウーを見ている。

首相「死なない方法？」

外務官「そうなんです！將軍様を満足させつつ、

それでいて死なない方法ありました！」

参謀長「核ミサイルは撃つ？」

外務官「將軍様を満足させるには、撃つしかないでしょう」

参謀長「じゃ、死んじゃうじゃん！」

外務官「核シェルターですよ！」

一同沈黙。

参謀長「なるほど！」

首相「あつたね、核シェルター！」

外務官「反撃の核ミサイルを核シェルターでやり過ぎすんですよ。

ほとぼりが冷めたら出て行って

日本にでも韓国にでも亡命しましょう」

技術長「日本、行って…、中野ブロードウェイ行ってえー…」

中佐「亡命とか、貴様は相変わらず、弱腰だな！」

外務官「じゃあ、死なない方法考えよ！」

首相「まあまあ…で、全員入れる？」

参謀長「五、六十人は入れるんじゃないかな？

ねえ？大将？」

大将「あー確か五十人が一ヶ月暮らせる想定です。

(軍曹に向かって) オイ！軍曹！」

軍曹「(敬礼しながら) は！」

大将「核シェルター、正確に何人入れるか

詳しく調べて報告してくれ」

軍曹「了解しました！」

軍曹、出て行く。

首相「でも五十人ぐらいか、少ないなあ」

参謀長「将軍様とご親族含めると三十人ぐらいいるぞ」

首相「あと二十人か」

参謀長「（みんなに質問しながら）核シェルター入る人！」

皆、手を挙げるが、

科学者は眠っているので手を挙げていない。

参謀長「じゃ、我々六人入ると、残り十四人」

外務官「あ、車椅子のカレも入れてあげた方が？」

首相「核シェルターをバリアフリーにするの大変だからいいだろ」

技術長「（笑いながら）いい、あいつは入れなくていい。

あいつだったら核ミサイル撃たれて

さらにマッド化して悪魔の毒々モンスターみたいに

なるんじゃない？」

外務官「首相や参謀長は奥様やお子様か」

いらっしやるんじゃないですか？」

参謀長「いや妻はいい。子供一人入れてくれれば」

首相「私も妻はいいや、子供だけで」

外務官「えーそんな感じなんですか！」

首相「まあ、そんなもんよ…」

参謀長「じゃ、うちの子供と首相の子供入れると残り十二人！」

首相「食堂のよし子ちゃん、入れようよ！」

参謀長「賛成！」

外務官「よし子ちゃんって、

いつも大盛りしてくれるあのおばさん？」

首相「おばさんは失礼だな、癒されるんだよあの笑顔」

参謀長「だよね！」

首相「あと、喜び組の華子ね」

参謀長「首相ー、わかってますね」

外務官「喜び組って、将軍様のモノじゃないですか！」

首相「いや、優しんだよ、華子は」

参謀長「そうそう、典型的なヤリマン」

外務官「ヤリマン!？」

首相「そうヤリマンって、優しさの究極なんだから」

参謀長「誰にでも尽くしたいっていう博愛精神!」

首相「そのままさしくガンジー!」

外務官「首相、酔ってます?」

ガンジーとヤリマン、同じにしないでください」

首相「華子はエロガンジー」

ギターを構えて唄い出す。

首相「(ギターをC/E♭m/F/G、で弾き唄う)

♪ハナコーーハナコーーエローーガンジーー」

参謀長「そう、どんな人にも愛を配ってくれる」

外務官「二人とも何があつたんですか!？」

首相「君にも愛が届くかも…」

外務官「いや、大丈夫です。」

じゃ、よし子さんと華子さんは入れましょう。

あと十人ですが」

技術長「(マリファナの煙を吹き出しながら)

じよ、女性ばかりでなく男性も入れていただきたい」

首相「え?もしかして技術長、そっち?」

技術長「(マリファナで笑いながら)フフフフ…

世の中、十人に一人はゲイですよ。

五十人入れるなら五人はゲイを入れていただかないと」

首相「つてことはレズや、バイや、

トランスジェンダーも入れないとダメ?」

技術長「先進国家なら、そうするでしょうね」

参謀長「いや、ウチは後進国家なんで、

そこんところは大口に見て欲しいな」

技術長「じゃあ、ゲイ二人入れていただければ大丈夫です。

太ったのと、痩せたの」

外務官「では太ったゲイと痩せたゲイ、二人入れると残り八人」

技術長「(外務官に向かって) 極端なのにしてな」



中佐、自発的に手を挙げて入ってくる。

中佐「あ、じゃあ、諜報部のエリカを入れてください！」

女多い方がよくないですか？」

首相「わかったわかった、じゃ、

エリカ入れよう…大将は誰がいる？」

大将「…うーん…あ、いや、いいです…」

参謀長「この際だから言っておけ」

大将、しばらく言おうか言わまいか悩む。

首相「言った方がいいって、特権なんだからさ」

大将「実は…入れたい人が一人います」

参謀長「誰？」

大将「先代の喜び組のひとりだったんですが…」

参謀長「先代の喜び組!？」

大将「キャサリンって知ってます？」

首相「いた!キャサリンって。アメリカ人のグラマラスな女性いたね」

外務官「(英語っぽく)グラマアラス、キャアサアリン？」

大将「先代に紹介されたんですが、

最初は好きにはなれませんでした。

しかも彼女は英語しか話せなかったので、

なかなか意思の疎通は難しく、

カラダだけの付き合いでした」

参謀長「あ、だから英語話したいって」

大将「そうなんです…」

でも、ようやく恋心が芽生えた頃…

先代がなくなりました。

先代が亡くなって將軍様が後を継ぐと、

彼女はアメリカ人だからと言う理由で喜び組を解雇になって…」

首相「そうだったけ?キャサリンどうなったんだっけ…」

大将「喜び組を解雇になって、

地方で強制労働させられてるんです…」

参謀長「マジか…」

首相「えげつないなあ…」

大将「大事なものって、いつもなくなってから気付くんですよね…」

中佐「処女もね…」

技術長「おいおいメロドラマかよ」

首相「強制労働の件は知らなかった…すまないな」

大将「今はキャサリンを心から愛しています！

あの時、一緒になってたら、

今頃は幸せに暮らしていたと思います。

どうか強制労働している彼女を探して、

シエルターに入れてください！」

首相「わかった。探し出して彼女も入れよう」

外務官「ではエリカとキャアサアリンを入れると残り六人です」

技術長「あとは、料理人と大工と航海士と楽器できる人と…」

外務官「ワンピースですね！」

技術長「お！知ってる？」

外務官「日本の漫画の！」

技術長「そうそうそう！」

外務官「続き読みたいですよね！」

技術長「読みたい！」

外務官「だから絶対に死にたくないですよね！」

技術長「死にたくない！」

ジョジョだって今8部だけど

このペースで連載したら

第十五部ぐらいまで続くからね。

絶対読みたいじゃん！」

外務官「うわ！まじ読みたいっす！第十五部。

どんなジョジョが出てくるか想像もつかない」

技術長「だよね！（中佐に向かって）君も若いんだから、

ジョジョの続き気になるだろ？」

中佐「ジョジョ？」

何ですか？ジョジョって？

そんな敵国の文化のことを知りたくもありませんけど」

技術長「ジョジョ知らないの？ジャパニーズマンガの最高峰！」

外務官「確かに！」

中佐「だから知りたくもありません！」

技術長「『ジョジョの奇妙な冒険』通称『ジョジョ』！」

中佐「（耳を押さえ聞きえないようにして）アーーーーー」

技術長「（大きな声で）『ジョジョの奇妙な冒険』通称『ジョジョ』！」

大将「『処女の奇妙な冒険』?」

技術長「いや処女がどんな冒険するんだよ!」

大将「『痴女の奇妙な冒険』?」

技術長「お前もうAVメーカー立ち上げろ!痴女じゃなくてジョジョ!」

中佐「痴女でも処女でもなんでもいいんですけどー」

大将「俺は痴女がいいなあ」

中佐「じゃ僕は処女がいいです」

技術長「マリファナがまずくなる!」

神聖なジョジョと並べるな!」

中佐「処女だって神聖ですけどね」

技術長「うるさい!全巻貸してやるから読め!」

中佐「いやいやいや、そんな敵国の本を持っているのが見つかったら、

それこそ処刑ですから」

技術長「大丈夫大丈夫、ねえ首相?」

首相「まあ、ウチは閉鎖的な国だけど、

先代が映画好きだったから、

意外とその辺は寛容だったよね」

参謀長「さすがに国民には禁止してたけどね」

首相「先代のレコードとDVDのコレクションは世界一だった」

参謀長「そりゃそうだよ国家予算使って揃えてんだもん」

中佐「あのみなさん、さつきから、

外国の文化について語っていますが、

自分たちの国の文化には触れないんですか?」

首相「うーん、ウチの文化でなんかいいのある?」

中佐「音楽とか?」

首相「何?どんなやつ?」

中佐、立ち上がって先の国家を歌い出す。

周りに向かって自信満々に。

大将、歌い出したくてウズウズしている。

技術長「今、注目すべきはこっちじゃなくて、

(大将の方を指して) あっちなんです」

大将、我慢できなくなって立ち上がり歌い出す。

大将と中佐、気持ちよさそうに歌い出す。

大将と中佐、座る。

中佐「立派だと思っんですが…」

首相「言っちゃあ悪いけど、あれ、学芸会」

中佐「え！国歌ですよ！」

首相「『古きを訪ね、新しきを知る』。

こんな歴史の浅い国に

独自の芸術なんて根付かないって。

だって古きがないんだもん」

中佐「そんなこと言ったら、この国で生まれた僕たちは

何もできないじゃないですか！

古きを僕らが作ればいいんじゃないですか！

だって何事だって最初があったわけで、

僕らが最初になればイイんじゃないですか！」

大将「おう！やってやろうぜ！」

外務官「いいこと言っな…」

技術長「オマエら工口軍部ができるのは

『痴女の奇妙な冒険』シリーズとるぐらいだろ！」

首相「でも將軍様みたいに、あれはダメ、これはダメじゃあ

何にも生み出せないね」

中佐「やんなきゃ、わかんないじゃないですか！」

首相「やんなきゃわかんないよ。

だから先代はやったんだよ。

映画を自分たちの文化にしようと

メチャクチャ頑張って作ってた」

首相「日本から特撮上手なチーム呼んで、

『ゴジラ』にそっくりな映画作ってた」

参謀長「楽しかったね、あんときは」

首相「みんな必死にいいものを作ろうって

本気で頑張ってたもんね」

大将「あの時は本当に頑張った！」

中佐「うまくいったんですか？」

参謀長「微妙だったよね」

大将「でしたっけ？意外と良くなかったですか」

参謀長「先代はわかる人だった…」

首相「將軍様は自分の好きなものしか認めない」

参謀長 「ワンオクはオツケーだけどストーンズはダメとかね」

首相 「あんな素敵な先代でも

子育てだけはうまくいかなかったんだな…」

一同、うなずきながら沈黙。

外務官 「いいこと考えました！」

中佐 「誰が？」

外務官 「僕が！僕が考えました！」

首相 「何？」

外務官 「將軍様の絶対頭あがない人って、

やっぱり先代じゃないですか」

首相 「先代には絶対、反対できないね」

外務官 「將軍様に説得してもらいましょようよ！

核ミサイル撃つなって」

首相 「それができれば苦勞しないんだが」

外務官 「イタコですよ」

首相 「イタコ？」

外務官 「イタコに先代を呼んでもらって、

呼んでもらった先代に將軍様を説得してもらいましょよう！」

技術長 「お前、今、自分の目見てみ、

完全感覚ドリーマーになってるよ」

首相 「ちよっと面白そうだけど

うまくいくかな？」

参謀長 「現実的に考えるなら核シエルターだよね。

あと誰入れるんだっけ？」

首相 「その話、終わってなかったよね。

あと何人だっけ？」

参謀長 「えーっと華子、キャサリン、エリカもだっけ…」

軍曹が現れる。

軍曹 「大将、先ほどの核シエルターの件で報告に参りました」

大将 「おお、ご苦勞！」

で核シエルター、正確には何人入れるかわかったか？」

軍曹 「ハイ、それが、先代の時代は確かにあったんです。

五十人が一ヶ月暮らせる高性能核シエルターが」

大将「それはわかっておる」

軍曹「先ほど調べてわかったのですが、

將軍様の時代になって核シエルターはなくなりました」

大将「ああ？」

軍曹「核シエルターなど逃げることは卑怯者がすることだという理由で、核シエルターは破棄されたことです」

大将「核シエルターは、今はもうないってこと？」

軍曹「いや、あることにはあるんです」

大将「どっちだあ？」

軍曹「あるんですが、將軍様一人用の小さな核シエルターだけ」

大将「ガッデム！」

外務官「ガッデエエムウ！」

技術長「卑怯者とか言つて、あいつが一番卑怯者じゃねえかよ」

参謀長「何ということだー！」

首相「軍部も知らなかった？」

参謀長「初耳だ…」

一同沈黙。

首相「（外務官に向かって）いいイタコ、知ってる？」

外務官「…し、知っています…」

暗転。

アナウンス「十年前」

明転すると舞台にはキツチリとした服を着た技術長のみ。

技術長は嬉しそうに誰かに語っている様子。

技術長「大將軍様、

ボイジャーが宇宙の端っこに辿り着いて

壊れてしまったとしましょう。

壊れる瞬間に送った写真は

200億キロ離れた地球に届くまでに20日かかるんです。

誰も見たことのない宇宙の端っここの写真が

地球にたどり着いた時、  
賞賛されるべきボーイジャーはもういないんです…  
ボージャーの孤独…なんか共感しちゃうんですよね。  
何かを成すには孤独に突き進むしかないんです…  
たとえ賞賛されなくても…」

暗転。





イタコ「おお！首相！こっちは音楽聴き放題で愉快だぞ」

首相「もうすぐいきますので待っていてください！」

イタコ「待ちきれん！早く来い！」

首相「私からも質問があります」

イタコ「なんだ？」

首相「失礼ですが好きな映画は何ですか？」

イタコ「知っておるだろ…言わすのか」

首相「誠に恐縮ですが…本人確認のために…」

イタコ「ポール・ヴァーホーベンの『スターシップ・トゥルーパーズ』、

ロバート・アルトマンの『ナッシュビル』、

マーティン・スコセッシの『グッドフェローズ』、

あと日本の『ゴジラ』、1954年版のやつ」

将軍様、深く頷く。

イタコ「何度も見せたよな？」

首相「失礼しました、大將軍様」

参謀長「大將軍様！参謀長でございます！」

イタコ「うふふ」

参謀長「ははは」

イタコ「久しぶり」

参謀長「お久しぶりです」

イタコ「息子に尽くしてもらってるようだな」

参謀長「もちろんですとも」

イタコ「すまないな…」

参謀長「…当然のことです」

イタコ「もう少し生きていらればな…」

参謀長「…（泣きながら）大將軍様…」

イタコ「水っぽくなったな」

参謀長「すみません、久しぶりだったのでつい」

イタコ「本人確認だな？」

参謀長「すみません、大將軍様！」

イタコ「質問はなんだ？」

参謀長「私に続く言葉を言ってください。『栄えよ祖国』」

イタコ「『ひれ伏す諸国』」

参謀長「『自由であるため』」

イタコ「『規律に従う』」

参謀長「『命の限り』」

イタコ「『尽くしきらん』」

参謀長「『我は永遠』」

イタコ「『この世は楽園』!」

参謀長「お帰りなさいませ、大將軍様!」

一同、立ち上がり拍手をする。

一同、大將軍の帰還を喜び懐かしむ。

イタコ「して、我が息子はおるか?」

將軍様「ここにいます!」

イタコ「元気なのか?」

將軍様「父上のご遺志を、頑張って継いでおります」

イタコ、悲しい表情になる。

イタコ「…辛かっただろうな…すまなかったな…」

一同、感涙する。

イタコ「私は、お前にとって良き父であったか?」

將軍様「父上、そちらはどんな様子ですか?」

イタコ「私は、お前にとって良き父であったのなら良かったのだが?」

將軍様「父上、会いたかったです!」

イタコ「お前も、元気そうでした。」

何か困っていることはないか?」

將軍様「父上の教え通り、富国強兵に邁進しております。

でも、みんななかなか言うこと聞かなくて…」

イタコ「そんなものだよ」

將軍様「(笑いながら)まるで保育園の先生をやっているみたいだ」

イタコ、笑う。

將軍様「だからついつい処刑が増えちゃって…」

イタコの顔から笑いが消える。

イタコ「何か困っていることは？」

将軍様「困ったこと…」

将軍様、しばらく考え込む。

将軍様「困ったことは、父上がここにいないことです」

一同、感動する。

イタコ「すまないな…」

一同、再び感動する。

イタコ「首相、困ったことはないか？」

首相「(少し間を開けてから) 全くございません！」

外務官、みんなを見回す。

イタコ「そうか…それは素晴らしい…な」

イタコ、しばらく沈黙。

イタコ「参謀長、困ったことはないか？」

参謀長「(少し間を開けてから) 全くございません！」

外務官、みんなを見回す。

イタコ「誰か、困っていることはないのか？」

一同、沈黙。

イタコ「何か言いたそうな顔をしているな、若いの」

外務官、イタコの顔をチラリと見る。

イタコ「なんだ？言ってみろ」

外交官「いえ、何もありますん」

イタコ「なんだ？言ってみろ」

外務官、しばらく沈黙の後、語り出す。

外務官「えー、外交問題なんですけど…」

将軍様「何を言い出すんだ、貴様」

外務官、ビビって何も言えなくなる。

イタコ「外交問題、何かあるのか？」

将軍様「いや、特に。核ミサイルが発射目前ですので

むしろ順調と言えます」

しばらく沈黙。

イタコ「正気なのか？」

一同に緊張感。

将軍様「父上がやったように、核ミサイル開発に重点を置いた外交を…」

イタコ「正気なのか？」

将軍様「間違ったことはしていないつもりです」

一同、沈黙。

イタコ「(怒りながら) 参謀長！」

参謀長「は、はい！」

イタコ「核ミサイルの発射実験を繰り返すことで

世界を挑発するのが目的だったはずだ！

本当に発射するのか？正気なのか？」

参謀長、黙る。

将軍様 「しかし、いつまでも挑発だと…」

イタコ 「参謀長！」

参謀長 「は、はい！」

イタコ 「制御不能、暴走しているように思わせて、

相手の核の攻撃を防ぐという

極めて合理的な作戦だったはずだが！」

参謀長、黙る。

イタコ 「正気なのか？」

参謀長、黙る。

将軍様 「いつまでもバカにされたくないんです」

イタコ 「誰もバカにしておらん」

将軍様 「父上の時代とは違うんです！」

撃たない、勃たない、不能な豚って影で言われて…

何としても撃つ！」

イタコ、冷静になる。

イタコ 「撃てば、国民が苦しむ…、わかるな？」

将軍様 「絶対、撃つ！」

イタコ 「一緒に日本のアニメ『この世界の片隅に』を見たよな」

参謀長 「あれは亡くなる数日前でした…」

イタコ 「あの時言ったよな、

『これを観た後に戦争を起こしたいと

思うやつなんて絶対いない』って」

将軍様、少し冷静になる。

イタコ 「あの言葉をお前の口から聞いたから…

お前に全て任せられると思ったんだ。

あの言葉を聞いたから私はこの世を去ったんだ」

将軍様 「父上…」

イタコ 「すずさんをこれ以上苦しめちゃダメだ」

将軍様、イタコの言葉が沁みている様子。

イタコ「日本のアニメ『火垂るの墓』も一緒に見たじゃないか」

将軍様、俯いて頷く。

イタコ「節子を増やしちゃダメだ」

将軍様、俯いてさらに深く頷く。

皆は、顔を見合わせて、小さく喜ぶ。

イタコ「お前の好きな本多猪四郎(いのしろ) 監督の『ゴジラ』だって水爆批判の映画じゃないか…」

将軍様、急に顔を上げる。

将軍様「何の『ゴジラ』だって?」

イタコ「本多猪四郎(いのしろ) 監督の『ゴジラ』…」

将軍様、しばらくイタコを見つめる。

将軍様「(怒りながら) お前、誰だ?」

イタコ「…」

将軍様「(怒りながら) 本多猪四郎(いのしろ) 監督だろ?」

参謀長「まあ、日本ではどちらとも読むらしいので

『いのしろ』と呼んでしまう人もいますよっつです」

将軍様「(怒りながら) 父上が、尊敬する監督を間違えると思うか?」

参謀長「いえ、思いません」

将軍様「(怒りながら) お前、誰だ?」

皆、しばらく沈黙。

イタコ、震えだすが平静を装う。

イタコ「ああ、すまなかつたな…」

久しぶりにこんな話したから、つい」

将軍様「2、3、質問するぞ!」

いきなり暗転。

そして暗いままアナウンス。

イタコ「(アナウンス調で) 三日前」

明転すると二日前の様子。

映像でいうところのカットバック(回想シーン)。

将軍様以外の全員がいる。

イタコ「『我は永遠、この世は楽園』!」

イタコ、先代になりきっている。

イタコ「(急に普通のイタコに戻り) どうでしょう?」

参謀長「いい!」

首相「かなり似てた!」

大将「(驚いた顔しながら) 本物かと思った!」

首相「いやいや油断するな!」

将軍様は疑り深いから、絶対ディープな質問責めがくるぞ!」

イタコ「大丈夫です! 私、大将軍様の大ファンだったので

細かいことまで全部頭に入っています。

どんなディープな質問でも答える自身あります!」

中佐「すごい自信だな。イタコは出来ないくせに!」

外務官「じゃ、お前探してこいよ! ちゃんとできるイタコを!」

参謀長「イタコはできないけど、彼女相当な大将軍様マニアだぞ!」

イタコ、ドヤ顔。

首相「『この世界の片隅に』を観たお二人の話を

知ってるなんて驚いた!」

参謀長「『火垂るの墓』で将軍様が泣いたエピソードは

みんな結構知ってるけど

その感動エピソードは

かなりの近い人でないと知らないからな!」

中佐「(イタコに向かって)所詮、モノマネだろ。バレるぞ」  
イタコ「大丈夫です。大將軍様の好きな映画も

バッチリ叩き込みましたので」

中佐「バレた時のこと考えておいた方がいいな」

首相「アニメ系のディーブな質問来るんじゃない?」

参謀長「將軍様はアニメ好きだけど、先代はそうでもないから、

その辺りは大丈夫じゃないかな」

イタコ「將軍様の好きなアニメも心得ております。

一番好きなアニメが『ごちうさ』です」

首相「『ごちうさ』?」

イタコ「『ご注文はうさぎですか?』という日本のアニメです」

参謀長「『ごちうさ』…」

イタコ「『ごちうさ』のシャロを演じている声優、

内田真礼にぞっこんなのも知っています」

外務官「ムチャクチャ可愛いですよね」

技術長「いや、オレ、ムチャクチャゲイだから…」

首相「内田真礼」

参謀長「そういえば將軍様がよく、

その内田なんとかを拉致ってくれって

先代にお願いしてたわ」

首相「ああ、してたしてた」

外務官「恐ろしい」

首相「先代は全く聞く耳持ってなかったけど」

参謀長「これは出るな、内田なんとか」

イタコ「内田真礼です」

暗転。

明転すると、將軍様がイタコに質問する場面に戻る。

將軍様「2、3、質問するぞ!」

イタコ「疑うのであれば、何でも聞け」

参謀長と首相はニヤリとする。

將軍様、少し考える。



將軍様「父上が好きな映画の質問」

参謀長と首相、焦った顔になる。

將軍様「ジョージ・A・ロメオ監督の傑作、ゾンビ三部作を答えよ」

いきなり暗転。

そして暗いままアナウンス。

アナウンス「(アナウンス調で)二日前」

明転すると二日前の様子。

ホワイトボードがあり、

参謀長がイタコにゾンビ映画の講義をしている。

ホワイトボードにはゾンビ映画のまとめが書かれている。

参謀長「ロメロのゾンビ映画はただのゾンビ映画ではない、

これ先代の口癖だったから、絶対出るね！」

イタコ、受験生のようにノートを取って頷いている。

参謀長「特にナイト、ドーン、デイの三部作は

特に重要です！」

イタコ、頷く。

参謀長、予備校講師のように

ホワイトボードをバンバン叩きながら熱弁。

参謀長「それぞれゾンビと当時の社会を掛け合わせながら

見事に恐怖を表現しています、ハイこれ絶対出ます」

イタコ「先生、そのあとの三部作も何か、

その当時から表現していたのでしょうか？」

参謀長「ハイ！いいところに気付きました！」

(後期三部作を指して) これらもそれぞれ現代社会を

痛烈に批判していましたが、

先代はこの三部作はあまり好きじゃないので、  
ハイこれ出ません！」

イタコ「覚えなくてもいいですか？」

参謀長「余裕があれば覚えて欲しいですが、

余裕がなければ…忘れてください」

イタコ「スルーする！」

参謀長「ア——！」

一番大事なことを忘れてた！」

皆、その声に驚く。

参謀長「ロメロ監督ね。」

時々ロメオって言っちゃうやついるけど、ロ・メ・ロ！

アルファ・ロメオからロメオって言っちゃうやついるけど、

ロメオじゃなくてロメロ、ロ・メ・ロ！」

中佐「ちゃんと覚えておけよロメロ！ロメロ！」

暗転。

---

明転すると、将軍様がイタコに質問する場面に戻る。

将軍様「ジョージ・A・ロメオ監督の傑作、ゾンビ三部作を答えよ」

イタコ「ふふふ、引っ掛け問題か？」

ロメオじゃなくてロメロ監督だろ？」

参謀長と首相、ニヤリしている。

将軍様「チッ！」

イタコ「信じてもらえたのか？」

将軍様、少し考える。

将軍様「さらにディープな質問に答えてもらおうか」

イタコ「それに答えたら信じてもらえるのか？」

将軍様「父上なら、わかるはず。私の好きなアニメの質問…」

将軍様、少し止まる。

皆は、内田真礼の質問が来ると思ってた嬉しい顔。

将軍様「…ではなくてマーティン・スコセッシ監督、

名作『カジノ』の質問」

イタコ、少し焦る。

将軍様「ジョー・ペシ演じるチンプラ、ニッキーは

相手のヒットマンを捕まえて

二日間殴り続け、アイスピックでタマを刺しました」

イタコ、かなり焦る。

将軍様「それでも吐かなかったヒットマンに対して

行った拷問とは何だ？」

イタコ、かなり焦りながらも必死に

色々なことを思い出している。

外野に助けを求める。

技術長は自信なさげに耳をナイフで切るマネをする。

それを見たイタコは安心する。

イタコ「(自信満々に) 耳をナイフで切る！」

将軍様「(怒りながら) お前、誰だ！」

イタコ「…違うのか？」

将軍様「耳をナイフで切るのは

クエンティン・タランティーノ監督『レザボア・ドッグス』。

お前観てないだろ『カジノ』？」

再び、外野に助けを求める。

首相は自信なさげにバットで殴るマネをする。

それを見たイタコは安心する。

イタコ「いや違う、バットで殴る、だったかな」

イタコ、平静を装えなくなり取り乱す。

将軍様「万力でこいつの頭を潰せ」

イタコ「あ、そうそう万力で頭を潰すだ！万力で…」

イタコ、さらに取り乱す。

将軍様「地獄で観ろ！連れてけ！」

軍曹がイタコを抑えて退出させようとする。

イタコ、焦って色々バラそうとする。

イタコ「いや！違う！あいつらに、あいつら！

ねえ、そいでしょ！おい！おい…」

中佐は立ち上がりイタコに近づく。

中佐「気安く大将軍様の名を語るな！」

中佐、銃を構える。

暗転。銃の音が鳴り響く。

明転すると血を吹き出したイタコ。

暗転。

明転。

中佐「偽イタコめ！」

将軍様「参謀長！！」

参謀長「は、は、は…」

将軍様「とにかく発射せよ」

参謀長「はい！仰せのままに…」

将軍様「とにかく発射せよ」

一同「はい…」

将軍様「とにかく発射せよ」

一同「はい…」

将軍様「とにかく発射せよ」

一同「はい…」

暗転。

アナウンス「十年前」

明転すると舞台にはキッチリとした服を着た技術長のみ。  
技術長は嬉しそうに誰かに語っている様子。

技術長「大將軍様、元氣出してください！

もうすぐですよ、宇宙まで。

もうすぐ完成します、有人ロケットが！

我々の国から宇宙へ飛び立つんです！

そんな病気になるってなっている暇ないですよ！

大將軍様が送り出してください、我が国初の宇宙飛行士を！

病氣なんて吹き飛ばしてくださいよ！

大丈夫！宇宙に行くまで大將軍様は死にません！

そんなありがたいですか…

そんなこと言わないでください…

こちらこそありがとうございます…

大將軍様には感謝してもしきれないぐらいの

たくさんの夢をもらいましたから…

大將軍様、宇宙はすぐそこですから！」

暗転。

## 第7場「僕らのアポロ計画」

明転するとホワイトボードに

『僕らのアポロ計画』『監督』『スピルバーグ』

『マイケル・ベイ』『リドリー・スコット』と書かれている。

何か監督選びをしている様子。

技術長、手を上げて話す。

技術長「フランス・フォード・コッポラ」

参謀長「地獄の黙示録は凄まじかった！戦争映画のベストだ！」

首相「タイトルシーン最高！」

ナパーム弾で燃えるジャングルに合わせて

ドアーズの曲が響く！最高にロックンロール！」

参謀長「マーティン・スコセッシ」

首相「会いたい！」

技術長「ブライアン・デ・パルマ」

首相「最近、パツとしないな」

参謀長「クエンティン・タランティーノ」

首相「好きだけど長セリフになっちゃう

コーエン兄弟は？」

技術長「ブラックユーモア入りすぎない？」

参謀長「じゃ、サム・ライミもダメか」

技術長「ジム・ジャームツシュ！」

参謀長「あいつ爆破シーン撮れないよ！」

先代が好きだったヴァーナー・ホーベンとかクローネンバーグは？」

首相「残酷すぎー！」

技術長「デヴィッド・フィンチャー」

首相「いいけど、あいつめっちゃテイク重ねて俳優を潰すらしいよ。

デヴィッドでもリンチの方は？」

技術長「シニールになるな！」

將軍様ダメすにはリアリティが大事だから」

中佐「だから將軍様ダメすのやめましようよ！」

参謀長「もっと若手が良くない？」

技術長「ザック・シュナイダー」

首相「カッコいいけど暗い映像になりそう」

参謀長 「ニコラス・ウィンディング・レフン」

首相 「スタイリッシュすぎ！」

技術長 「ラース・フォン・トリアー」

首相 「怖い怖い、あいつ手にFUCKって刺青入ってんだぜ。

同じアジア圏で探さない？」

科学者 「カールスモーキー石井！」

首相 「誰だよ！あつ、『河童』の監督か」

大将 「黒澤明！」

首相 「死んでる！」

大将 「宮崎駿！」

首相 「アニメー！」

大将 「ディーン・フジオカ！」

首相 「誰だよそれ、知らないよ！」

大将 「ジエームズ・キャメロン！」

参謀長 「ああ、『ターミネーター』に核戦争のシーンあったね！

あ！じゃあ！新しいスター・ウォーズの監督！

JJ・エイブラムスは？」

技術長 「ああ、JJ・エイブラムスに

核ミサイル爆破シーン撮ってもらったら

メチャクチャリアルだな」

この様子をずっと見ていた外務官が怒り出す。

外務官 「バカーー！

あなたたちバカ！バカ！バカ！

酔っ払い！

僕らのアポロ計画台無しじゃないですか！」

技術長 「俺らのアポロ計画、進行中だろ」

参謀長 「キューブリックがアポロ月面着陸シーンを

捏造してみせたって言ってたじゃん」

首相 「JJ・エイブラムスが俺たちのキューブリックだ！」

外務官 「もっと真剣に考えてくださいよ！

あなたたちが挙げた監督って

20億とか30億とか使って映画作るような連中ですよ。

カールスモーキー石井以外は！

制作期間だって2〜3年かけますよ。」

カールスモーキー石井以外は！

どこにそんな予算と期間があるんですか！

そもそもあんたたち、

こんな大御所監督コントロールできるんですか？

なんだかんだ言ってるうまいことやられちゃいますよ。

カールスモーキー石井にすら

うまいことやられちゃいますよ！

そんなことしてる間に

ミサイル発射してみんな死んでしまいますよ！」

一同、沈黙。

外務官「いつものニュース映像作る監督で良くないですか？」

一同、沈黙。みんな納得いかない様子。

大将「俺が監督やる！」

参謀長「ん？」

大将「俺が監督やるんでみんなで映像を作りましょう！」

外務官「だから素人が付け焼き刃でやってもバレますから。」

演技指導とか合成とか

素人が知らないことたくさんあるんですから」

参謀長「いや、彼はハリウッドに留学して映画を学んでいるぞ」

外務官「ええ！？なんで！？」

にしては映画監督全然知らなかったんですけど…」

大将「本当のアーティストは、他人に左右されない」

中佐「大将、なんかカッコいいっす！」

首相「やりたいな！みんな映像作りたくないな！

どうせ死ぬならやりたいことやりたいな」

外務官「いや、無理だっす！」

参謀長「やろうぜ！完璧な偽ニュース映像作って將軍様を騙すぞ！」

中佐「僕、助監督でもいいですか？」

大将「助けてくれよ、中佐！」

中佐「ハイ！大将！」

大将「大将では無い。監督だ」

中佐「ハイ！監督！」



外務官「え、マジ？」

技術長「脚本は私が書きます」

首相「映画オタクだから心強いわ〜！

外務官にはカメラマンをやってもらおう！」

技術長「あ！メイクやります！」

中佐「（軍曹に向かって）お前何やるんだ？」

軍曹「車輜部やります！」

中佐「お！回せ回せ！」

参謀長「あ、録音部、誰やる？」

科学者「オレがやる————！」

マイクチェック、ワントゥー！

マイクチェック、ワントゥー！」

外務官「マジか！？マジなのか！？」

首相「（参謀長に向かって）あ！俺たちで音楽やろうよ！」

参謀長「うわ！やりたい！やりたい！」

外務官「マジなのか————！」

みんな、マジ。

外務官「マジだ————！」

暗転。

暗転の中、音声だけが聞こえる。

大将「はいカットオオオオオオ！」

カチンコの音『カン、カン！』

大将「はい、もう一回！」

中佐「いや監督、今のメチャクチャ良かったですよ！

OKだと思えますけど」

大将「いや、ピントが怪しかった」

中佐「おい！カメラ！ちゃんとやれ！」

外務官「やってるわ！光量足りなかったぞ、

照明部もつとレフ板強くあてて！」

参謀長「あててるわ！役者が動きすぎ！」

首相「なんで俺たちが照明部なんだよ！」

大将「首相！現場は上下関係のない神聖な場所です。もっと真剣にやってください！」

中佐「オイ！録音部！マイクバレてんぞ！」

科学者「すいませーん！」

大将「じゃあ次のテイクいきます！」

技術長「あ、マイク入りまーす」

中佐「じゃ、諸々よろしければ本番いきます！」

軍曹「あ、歩行者通ります！」

あ、どうぞ、どうぞ通ってください」

中佐「ではシーン5、逃げ惑う人々、テイク26」

外務官「カメラ回った！」

大将「本番、よーい！」

カチンコの音『カチン！』

大将「スタートオオオオオ！」

しばらく間。明転。

中佐と大将がモニターの前に立っている。

他の人は座っている。

中佐「えー、只今より、

敵国を核ミサイルで攻撃したと仮定して、

その際に放映する

ニュース映像の試写を行います」

大将「今回はリアリティのある迫真の映像を追求しました。

これならば確実に將軍様をダメさせると思います。

それではご覧ください！」

一同、喝采。自慢げな大将。

中佐、リモコンをモニターに向けて操作する。

場内が暗くなる。

5、4、3、2、1で、映像が始まる。

下手な映像。

下手な合成。

下手な役者たち。

棒読みで「わー、逃げるー」と逃げる人々。

そして首相と参謀長が作った下手な音楽が、

映像にかぶさって流れてくる。

カノン進行を使った下手なヒットソング風弾き語り。

かなりやばい素人丸出しの映像と音楽。

映像が終わる。

場内が明るくなる。

あまりにもお粗末な素人映像だった。

お粗末すぎてみんな本気で笑い出す。

技術長「ひどいね！」

首相「（笑いながら）大将、映像の才能なさすぎ」

大将「お言葉ですがお二人も音楽の才能の方は…」

参謀長「（笑いながら）ないないない！」

一同、大笑い。

外務官「やってる時はいけると思ったんですけどね」

参謀長「やっぱプロってすごいね！」

技術長「まあ、楽しかったけどね」

皆、楽しかった様子。

外務官「あの、いつものニュース映像作る監督に

頼んでおけば良かったですね」

首相「明日だもんな、將軍様の誕生日」

参謀長「明日撃てなかったら、全員処刑」

外務官「どうせならみんなでちゃんとした映画やりたかったですね！」

技術長「じゃ、私、脚本書く！」

参謀長「オレ、カメラやる」

外務官「じゃ、僕、監督やってみたいです」

大将「できるか、お前に！」

外務官「大将よりはいいもの作りますよ」

中佐「言うな！」

首相「次はコメディやりたいね！」

技術長「いや、あれ充分コメディだったけどね」

一同、大笑い。

参謀長「これより面白いのは撮れないよ」

一同、大笑い。

ゆっくりと笑いが収束していく。

皆、静まり返る。

首相「じゃ、みんなミサイル発射準備よろしく…」

一同、うなだれたまま執務室を出て行く。

暗転。

アナウンス「十年前」

明転すると舞台にはキッチリとした服を着た技術長のみ。

技術長は真剣な面持ち。

技術長「(泣きながら) 大將軍様、いろいろ目をかけていただき

誠にありがとうございました！

大將軍様が亡くなった後も

將軍様と必ずや宇宙に行きたいと思えます。

だって宇宙には領海がないんですよ。

宇宙条約で決まってるんです。

誰のものでもない、みんなのもの。

国境も何もないんです。

大將軍様も宇宙に行けば、ただの地球人の一人。

大將軍様がいつも言っていた本当の平和が

宇宙にはあると思うんです！

大將軍様の夢は將軍様が必ずや継いでくれることでしょう。

いやいやいや、大丈夫です、大將軍様！

必ずや宇宙に興味を持ってくれるはずですよ。

え！

何かあったらこの国を終わらせて欲しいだなんて、

そんなことできるわけじゃないじゃないですか！  
大丈夫です！将軍様はちゃんと育てています！  
なつてたつて大将軍様のお子さんなんだから！  
大将軍様！？大将軍様！？  
大将軍様————！！」

暗転。

## 第8場 「核ミサイル発射！」

厳かな音楽が流れる。

明転するといつもの七人と将軍様。

将軍様以外は立っている。

ラジオ音声が流れる。

皆、厳かにラジオの音声に耳を傾けている。

ラジオ「かねてより延期していた核ミサイルが今日  
憎き敵国に向け発射されることとなった。

将軍様、バンザイ！」

七人は真剣な面持ちでバンザイをする。  
そして静かになる。

将軍様「参謀長！」

参謀長「ハイ！」

将軍様「（笑いながら）ついにこの日が来たな」

参謀長「将軍様の発射命令さえ頂ければいつでも撃てます！」

将軍様「参謀長！」

参謀長「ハイ！」

将軍様「撃てーーーーー！」

参謀長「ハイ！（技術長に向かって）技術長！撃て！」

技術長「ハイ！」

技術長、外に出て行く。

技術長、しばらくして戻ってくる。

何か、機械音が鳴り響く。

皆の顔を神妙に見守る。

そして時計を見る。

技術長「ミサイル発射、10秒前！」

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1…

発射します」

ミサイル発射音が響き渡る。

技術長「核ミサイル無事、発射しました……」

真上に向けて……」

将軍様「真上に……向けて……？」

皆が、ざわめく。

参謀長「技術長、真上に向けてとはどういうことだ」

将軍様「敵国に向けて撃ったのではないのか？」

技術長「真上に向けて撃ちました」

首相「真上に向けて撃つと、どうなるの？」

技術長「真上に向けて7分進んだ後、燃料がなくなり

3分かけて落ちてきます」

首相「つまり10分後に我々の上に落ちてくるってこと？」

技術長「その通りです。つまり

(頭にミサイルが落ちてきたポーズをして) ドーンです」

大将「オラァー！核ミサイル自分とこに落とすバカ、

どこにいるんだ！」

将軍様「貴様、狂ったか!？」

技術長、いきなり笑い出す。

将軍様、逃げようとしてあわてて立ち上がる。

将軍様「俺は逃げるぞ！俺の核シェルターを用意しろ！

参謀長！俺の核シェルターを用意しろ！」

参謀長、何も答えない。

将軍様「(舞台袖に向かって) 誰か！俺の核シェルターを用意しろ！」

劇場の上手にあるシャッターが開き始める。

将軍様、慌てながらシャッターのところに行き、

ハシゴを登っていく。

将軍様「(ハシゴ登りながら) おい！バカ！処刑するからな！」

参謀長、そいつを撃て！」

参謀長「大将！」

大将「中佐、撃て！」

中佐「ハイ！」

中佐、技術長の横に立ち、銃を頭に突きつける。

將軍様「(はしご登りながら)早く撃て！」

中佐「ハイ！」

中佐、撃てずに震える。

將軍様「早く！早く！撃て！」

中佐「ハイ！」

中佐、やはり撃てず。

首相「(技術長に向かって)嘘、じゃないよね？」

技術長、時計を見て答える。

技術長「あと、5分で落ちてきます…」

將軍様「(シャッター閉まりながら)おい！お前！覚えておけよ！」

参謀長！来てよ！入れるよ！参謀長！

おい！バカ！お前ら、全員処刑だからな！

参謀長！来てよ！参謀長！」

シャッター完全に閉まる。

首相「まあ、どうせ死んだんだからいつか！」

参謀長「ロックンロールな生き方だぜ！」

皆、沈黙。

非常事態らしく照明は薄暗く、非常音が鳴っている。

アナウンス「ミサイル着弾まで、あと5分です。避難せよ、避難せよ」



中佐は相変わらず技術長の頭に銃を付けている。  
首相と参謀長はギターを弾いている。

中佐「なんですか！？なんでこんな最後を…」

技術長「すまないな…大将軍様の遺言だから…」

首相「（ギターにのせて）まさかこんな最後だなんて…」

参謀長「（ギターにのせて）想像もできなかったよ…」

二人「（ギターにのせてハモリながら）

でも、これはこれでアリかも…」

外務官「出たアジアのサイモン&ガーファンクル！」

中佐と技術長以外は、二人の唄に拍手して

朗らかなムードになる。

首相「（中佐に向かって）なあ、俺たち名作作った仲間じゃないか」

参謀長「名作…」

皆、思い出して笑い出す。

中佐も真剣になっていることが馬鹿らしくなって笑い出す。

中佐「名作…でしたね」

首相「あんな名作作ったんだから思い残すことないだろう。

残り数分。いがみ合っていないで好きなことやらない？」

大将、手紙を取り出して読み始める。

大将「デェアー、キャサリン…

あなたに会いたい。

あなたはいつも負い目を感じていた。

思い出す。あの夜のこと…」

首相「いいぞ…」

参謀長「首相！ラストワルツだ！」

首相「おっ！」

首相と参謀長は、再びギターを弾き始める。  
そのギター演奏に合わせてるように  
ラブレター朗読が合わさっていく。

大将「私はただの娼婦よ あなたの愛は重い  
私はただの娼婦よ 本気で愛さないでね  
私はただの娼婦よ 全ての愛は重い  
私はただの娼婦よ あなたの笑顔が好き  
さよなら

ガッデエム 知ったことが

ガッデエム どうでもいいことぢ」

外務官「いい発音だ！」

大将「君の暗い影は 僕が全部受け入れる 泣かないで  
何度生まれ変わっても どんな姿でも  
君に会いたい

泣かないで 愛してる わからなくてもいい

君のこと 愛してる どうやったって忘れられない

ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことぢ

ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことぢ」

中佐も軍曹もハモリだす。

三人「ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことぢ

ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことぢ」

アナウンス「三十秒で着弾します。緊急避難せよ！緊急避難せよ！」

外務官「こいつらバカかよ！」

死ぬのにラブソング唄ってるよ！

これを映画にしたい！」

技術長「脚本書こうか、監督？」

外務官「いや、今なら自分で書けるかも！」

技術長「(時計を見て)あと三十秒しかないけど」

二人、見合ってニヤリとする。

二人以外、ノリノリで歌っている。

大将、泣き始める。

みんな「ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことさ

ガッデエム 僕の愛の前では

ガッデエム どうでもいいことさ」

アナウンス「残り5秒。衝撃に備えてください。

5、4、3、2、1…」

大将「(メチャクチャいい発音で)ガアッデエム！」

外務官「幸あれ！」

暗転。

爆発音。破壊音。

しばらく静寂。

暗転開けると暗転前と同じ立ち位置のまま

皆、衝撃に備えるポーズをとっている。

技術長だけいない。

皆、自分が死んでいるのかと思っている。

大将「へブン？」

首相「いや、生きてる」

参謀長「なんなんだ？」

中佐「やった！生きてる！」

皆、大喜び。

外務官「あれ？技術長は？」

皆、技術長を探す。

舞台袖から『トッキリ大成功』の看板を持って

ゆっくりと顔を出す。

技術長 「テッテテー♪ドッキリ大成功！」

大将 「ドッキリ？」

首相 「ん？何がドッキリ？」

参謀長 「真上に撃ったことがドッキリ？」

技術長 「核ミサイルはそもそも撃ちませんでしたー、テヘツ」

首相 「どついつこと？」

技術長 「將軍をあそこに閉じ込めるためのドッキリ！」

皆、シエルターの方を見る。

技術長 「あれ、中から開けられない仕様にしといた」

皆、お互いの顔を嬉しそうに見合わせる。

技術長 「とりあえず核廃棄を全世界に宣言して

ほとぼりが冷めた頃に將軍様出そうぜ」

皆、大喜び。

首相 「素晴らしいドッキリだ！」

参謀長 「もう死んだと思った」

技術長 「敵を騙すには味方から」

中佐 「俺、危うく撃つとこだったじゃないですか」

技術長 「まあ、それで死んでも良かったけどね」

大将 「いやいやお恥ずかしい、

最後だから愛の歌を熱唱してしまった」

技術長 「大将！好きだ！愛してる！」

大将 「ドッキリ？」

技術長 「これはドッキリじゃない！ホントだよ！」

皆、何が起きたかわからない。

技術長 「カッコいいよ、大将！」

皆、驚いた様子で技術長を見ている。

技術長「中佐が毒を飲もうとした時、

カラダ張ってたの、キユンとした！

好きな人が

死ぬの嫌だから必死でドッキリ考えた！

さっきの愛の歌もカッコ良かったよ！

キャサリンが羨ましいと思っただよ！

え、あのラブレター読んでるのかなと思っただら

急に歌になったの、あれ何か、そういう技術あるの？

今は、そのおでこのタトゥーでさえも愛おしい！

今は、宇宙より大将が好き！

どうせ実らぬ恋だと知っているから…

知っているから…一度だけ…キスしてほしい…」

大将の前に行って、ゆっくり目を閉じる。

大将、困惑している。

皆、かなり驚いているが、愛の告白に感動する人も。

首相「大将、愛の尊さを一番知っているだろう」

参謀長「だったら、どうするかわかるはずだ」

みんな「キッス！キッス！キッス！キッス！」

大将と技術長の距離が近づく。

皆、祝福モード。

さらに距離が近づく。

みんな「キッス！キッス！キッス！キッス！」

科学者も嬉しそうに叫んでいる。

前のめりになって立ち上がってしまう。

科学者「立ってる———！」

暗転。

(終)